

第 2 回山ノ内浄水場跡地活用方針検討委員会議事摘録

出席者 土井座長 荒川委員 北尾委員 木村委員 竹山委員 山下委員

土井座長 定刻となりましたので、第 2 回山ノ内浄水場跡地活用方針検討委員会を開催させていただきます。本日は議題が 2 つありますが、議事に先立ちまして、前回御欠席だった御二方に、いきなりで申し訳ございませんが、自己紹介と山ノ内浄水場について感じておられる事をお話しいただきたいと思います。まずは北尾委員から簡単な自己紹介とご意見等お話しいただきたいと思います。

北尾委員 京都経済同友会の代表幹事をしております北尾と申します。仕事は、日東薬品工業という会社で一般薬を作っております。この度、山ノ内浄水場跡地活用と言うことで、小さいころからその周辺は良く行っておりましたので、大変懐かしい思いがあって良い跡地活用になれば良いなと思って喜んで参加をさせていただきました。第 1 回目、出ておりませんが、ここに意見等をまとめて頂いております。

跡地利用と合わせて京都市の財政を立て直すという面で一番ネックになっております地下鉄の増客も重要なこととお聞きしておりますので、そういう観点から意見を述べさせていただきます。やはり地下鉄に沢山乗って頂いてこれから利用者を増やして行く為には、何回も通ってもらう、固定客になる可能性が非常に高い病院を誘致する事と、大学が京都には沢山あります、医学部のない大学というのは本当に総合大学と言えるのかどうかというのをずっと思っております。そういった面では慶応大学というのは医学部があつてまさに総合大学だと思うのですが、京都の同志社大学・立命館大学を見ても医学部がないというのはどこか見劣りがすると思っております。特に同志社大学というのは、キリスト精神に則って出来た大学でもありますし、新島襄の創立経過を見てみますと最初に同志社の医学校を作ったり、看護の学校を作ったりしてありまして、同志社にとっても医学部を持つというのは、創立以来の精神にもよるところが大きいのではないかと思っております。

最近では医師不足が言われています。安全・安心という観点から医師を増やす必要があり、医学部の新設・増設を認める風潮が出てきております。ここしばらく医学部の開設がどの大学にも認められなかった訳ですが、ここにきて認可する動きも出てきたように思います。民間の活力と大学を利用するという面で、同志社大学や立命館大学に医学部と付属病院を設置してもらいたい。医学部ができると研究が大いに進みます。京都には分析機器メーカーも非常に沢山ありますので、そういった方面の研究も一気に進むのではないかと思います。

それと、この跡地は京都外国語大学に極めて近い所にありますし、そういう面ではいろんな海外から看護をする人達に来てもらうという様な事が国の政策としてされていますので、そうしたときには言葉が非常に大きな壁になるので、外国語大学とそういう物が一緒にあれば非常に活用出来るのではないかと思っ、て、私立大学医学部と付属病院という意見を述べさせて頂きました。それから医学部ができますと医学会等の学会というものが京都で行われることになります。今、経済同友会でも国際会議場の増床を提唱し、予算が付きましたので、5000人規模の会合が出来るようになる訳ですが、途端にホテルが足りなくなります。そういった面からも、総合的に病院・大学・ホテルそういうものを組み合わせていけば、人の動きが活発になるじゃないかとそういう考えを持っています。以上です。

土井座長 どうもありがとうございました。それでは、竹山委員お願いいたします。

竹山委員 竹山です。よろしくお願ひいたします。私、京都大学で建築を教えております。京都大学は吉田キャンパスに長らくありまして、今も工学部は吉田キャンパスですけれども、工学研究科、つまり大学院は桂に移転しつつあります。建築学科に関して言いますと、5年前大学院が桂に移りまして数年の内にはすべての工学系研究科が桂に移ります。この山ノ内浄水場は吉田と桂の間にありますので、車で行き来するときはずっとその前を通っています。地下鉄が延伸して、右京区役所や図書館ができて大変素晴らしいまちの中心になる可能性が高い場所だと思ひました。

それから先日見学させて頂きまして、疏水ができてからの歴史、京都が近代都市に脱皮してきたことの生き証人だなという感じを持ちました。

ところで、先日、私はエコミュージアムというような事をお話したので資料に書いてありますが、実は昨日までメディアアートとテクノロジーの学会で上海に行っておりました。上海は大変な建築のブームで市の中心地が、バブルの時の東京に近いくらいに大きく建て変わっています。建て変わっていますが、古い低層の住宅地も残っていて、この対比がアジア的で面白い。特に今回、浄水場のことがありましたので、上海でいくつも古い租界の跡地や製鉄所の跡地、製粉所の跡地、これを転用して新しい商業施設や文化施設にしているものを見てまいりました。成功しているものはいくつかあって、一番モダンな施設がフランス租界の跡地で新天地にあります。ここは本当に街の真ん中の大変良いところで、隣にデパートみたいなところもあり、大変な賑わいを見せておりました。レンガ造りも倉庫群のような感じで、レストランやナイトクラブやいろんなものがあり、ハイブラウな感じでした。それから、商業施設として手作りのアートやギャラリーがあり、気さくに入れるようなレストランが並んでいます。

それから、昨日帰りの直前に寄った、英国租界の跡には、大変見事なレンガ造の建物があり、かつての東京の同潤会のアパートのように小ぶりでお洒落なギャラリーや店が

入っておりました。

ただ、どこよりも感動を受けましたのが、紅坊国際文化芸術区、これも製鉄所の跡地ですが、大変広い敷地の中にギャラリー、特に彫刻のギャラリーが大変広いものがあり、それからショップ、カフェ、美術館等に転用されていたのですが、古い建物を見事に活かして、いろんな機能が入っている文化ゾーンになっていました。感心したのが、巨大な製鉄所の大きな構造体の2階3階あたりに入れ子構造でスペースを造りまして、そこをオフィスに貸していました。これは、お洒落なデザインオフィスですとかそういったアクティブな人達が集まりそうな場所で、そういうオフィスを誘致して、賃料で基本的な採算を取っているようです。

その直ぐ下の1階は全部真っ白な彫刻のギャラリースペースで、それらの建物に囲まれた中庭のゾーン、大きな広場には屋外に彫刻が並んでいました。

ここには木曜日に行きましたが、決して行きやすい所ではないのですが、子供連れや外国人が大変多く、広いですから物凄く盛況という感じはないですが、大変多くの人達が集まって、お洒落なギャラリーやアートのブックショップ、それから vitra というスイスの有名な家具屋のショップがあつたり、イタリアのシステムキッチンのショップが出ていたり、もちろん芝生に面したカフェがあつてなかなか良いなと思いました。

エコミュージアムというのは、この間お話したことですけれども、基本的には地域の生活文化を守るという考え方で、エコミュゼというフランスでの概念で1960年代位に言われはじめた言葉です。日本で言うと、明治村なんかも一種のエコミュゼです。明治村の方が古いですし、本来は元あった場所で保存されるべきというのがエコミュゼの思想ですが。そのエコミュゼの考え方はイギリスで特に拡大されまして、古い製鉄所の跡地ですとか、鉱山の跡地ですとか、あるいは18世紀に世界最初のアイアンブリッジという鉄橋がイギリスで作られましたが、これを守り育てるといふ様なこと (The Iron Bridge Gorge Museum)。それから農村の風景を守る、あるいは北欧なんかでもそういうテーマでかつての生活文化を守り育てるテーマパークのようなもの、そういったものとしてエコミュージアムがあつて、そのエコミュージアムは厳密に言うと、地域文化と密接に繋がったかつての生活文化を含めてその場所の歴史を回想する場所です。

ドイツとフランスの境目の製鉄所跡地 (フォルクリンゲン製鉄所) が、最近転用され、ギャラリーになりました。

そこでは、アーティストが盛んに入り込んでいろんな物を造っていますし、それから製鉄所の巨大なプールをダイビングスクールに使ったり、色々なことが行われています。

先日エコミュージアムと申し上げたのですが、今回、もちろん水という過去の記憶につながれば良いのですが、必ずしもそれにこだわらなくても何かその場所に今ある施設の記憶を継承できるような場所になると良いのではないかと考えたわけです。

建築の設計をしていますといつも考えることは、今この場所でなければ出来ない事は何かという事です。隣にどんな建物があるのか、太陽はどちらにあるのか、川はどちら

に流れているのか、風はどのような風に吹くのか、山はどのような風に見えるのか。その場所でなければ出来ない事が今回の山ノ内浄水場でどのように可能なのか。場所の記憶がいかに関承されれば良いか、と、見学をさせて頂いたときにつくづく感じました。今回上海ではそうした再生施設が大変アクティブでかつ若い人達で溢れているということを見て、改めてそういう施設になったら文化都市・京都の目玉として世界中から人々が集まる都市の名物になるだろうと思った次第です。これまでのようにただ、お寺とか古いものとかだけじゃなくて、きっと現代の生活遺産を新しく未来の文化遺産へと繋げた、まったく新しいタイプの文化施設になるのではないかと。

土井座長 ありがとうございます。

ではまず、全体の資料を事務局から説明をしてもらい、皆さんからのご意見を頂きたいと思います。

議題1ですね「立地・誘導する施設あるいは機能分野」施設と機能分野について事務局から説明をお願いします。

事務局 (資料の説明)

土井座長 今日は、前回の議論を受けて、第3回4回での施設の絞込みに向けて、跡地活用の施設あるいは機能分野について議論して行きたいと思います。

木村委員 大学と一括りに呼んでいますが、実は大学にも様々あって、海外の場合、例えばコミュニティカレッジやリサーチユニバーシティと呼び分けています。ですから、大学といってもどのような種類の大学、リサーチユニバーシティなのかそうでないものなのか、何かと組み合わせて考えるのか、議論をすすめるにあたって、そういった視点は持ったほうが良いと思います。

土井座長 1つの施設になるのか、中心になるものはどれか、というのを出来るだけ皆さんと議論させていただき、それに付随していくものがあれば考えていきたい。まず中心になるようなものについて議論してまいりたいと思います。

竹山委員 一つ教えて欲しいのですが、京都市では、高齢者の地下鉄等の運賃を無料にされていますか。

事務局 70歳以上の高齢者の方に、所得に応じ毎年3千円から1万5千円の負担金をいただいで、市バス、地下鉄全線に乗っていただける敬老乗車証を発行しております。なお、生活保護を受給されている方等については負担金をいただいでおりません。

また、これとは別に、障害をお持ちの方に、福祉乗車証を発行しており、こちらは負担金はいただいております。

土井座長 それではこれから皆様のご発言・ご意見を賜っていきたいと思います。資料1をご覧ください、前回の発言について事務局で4つの分類に分けていただいております。本日は、最終的に機能分野を3つ程度までに絞りたい、施設まで絞ればありがたい。先ほど、木村委員が言われたように、大学といってもいろいろあり、文系と理系では学生数も違うし、同じ面積であれば施設の構成も違うでしょう。ですから、ここで大学についてはもう少し話を詰めて行きたいと思います。

それから医療福祉や若い人を引き付ける観光、文教施設についても検討していきたい、あるいはもうちょっと言い方を変えて創造機能のような機能のほうが良いかもしれません。

竹山委員 参考資料1に書かれてある「文化芸術とまちづくりを一体化させた取組を促進することにより、京都を魅力に満ち溢れた世界的な文化芸術として創生する」というのがたいへん重要な方向性です。

土井座長 そういったことを、いくつか決めて行きたい。決めるのは非常に難しいかもしれないので、皆さんにもう少しご意見を出していただいて、その上で議論をしていきたいと思います。

荒川委員 前回、大学をひとつ誘致してくるというよりは、もっと複合的に沢山の大学、学生が集まれるような場所を作ったらどうかというのをご提案しました。その後もいろいろ考えておまして、京都にはメディアセンターとかアートセンターという様な機能が不足しているのではないかと考えました。と言いますのも、うちは芸大ですから展覧会等を年中やっております、特に卒業制作展を京都市美術館でやろうとした場合に、京都は芸大が全国の中でも多い地域だと思いますけれど、スペースの奪い合いみたいな状態になってしまいます。京都市美術館は、良い建物なんですけれども、老朽化していて照明や広さの面でかなり使いにくい状態になっています。ですから、単に美術館というよりはもう少しアクティブな形のアートセンターみたいなものが京都にあって現代アートや伝統工芸も含めたものを発信する場所になれば良いと思いました。

また、大学の医学部と病院、ホテルという組み合わせや、医療とアートとか、今まではミスマッチに感じていたものを組み合わせることによって、非常に魅力的なアクションが起きている例も沢山ありますので、そういう組み合わせも面白いのかなという風に思います。

ということで、4つの機能ということで出していただいておりますけれども、これをどれ

か 1 個に絞り込むというのではなく、何かコンプレックスさせることで今までにないような面白い場所と現象が起きてくるのではないかと思いました。

木村委員 1 点目は質問なのですが、京都の場合、東のエリアに大学は割合多いですが、西のエリアについては京都市の都市計画の中で、どういう機能が不足しているという問題意識を持っているのかということももしあれば教えていただきたい。2 点目は、5 つの大学から問い合わせがあったということですが、これは具体性のある提案があるのかどうかを教えてください。

あと、お話を聴いていて思い出したのが東京の聖路加国際病院で、ビル 2 棟にホテルとオフィスと病院がうまくリンケージしていてあれも凄く面白い仕組みだなという風に思います。

土井座長 京都市に質問が出ましたので、問い合わせの件とこのエリアに立地を望むものや西のエリアをどのような形にして行きたいかについて正式な見解でなくても、今お考えのことをお答えください。

事務局 土地利用の面から言いますと、区画整理がなかなか進んでいないこともあり、都市機能として道路が足りないという問題があります。ただ山ノ内と言いますと、葛野大路を下がって行けば、外国語大学等がありますので、機能として何が欲しいかと言いますと、1 つは大学系です。この地域には島津製作所もあれば三菱自動車もあり大日本印刷もあるので、ある意味ものづくり系に寄与するような機能、または先ほどお話にありました様な病院なども都市にとっては必要ではないかとの思いはございます。

都市計画の関係で言いますと、この委員会の中でご議論いただいたものを我々が制度にしていくということですから、京都市として、こうしたいとかいうような事はなかなか申しあげ難いと思っております。

事務局 5 つの大学からの問い合わせの状況につきましては、あくまでも問い合わせレベルでございまして、用地の活用の方向性や提供時期等の問い合わせにとどまっておりますので、具体的な提案ではございません。

山下委員 前回 3 つの機能を考えていると申し上げました。大学はその 1 つです。先ほどからお話を聞いていますと、医療関係も含めた総合大学という方向も良いのではないかと感じました。山ノ内周辺には島津製作所あり、また市内には日本企業のリーダー的な、先進的な技術を持たれた企業が沢山ありますのでそういった企業と一緒にやっていたる大学がよいかと思っています。

あと、竹山先生の上海の話ですが、私も上海には行きます、行くたびに 1 年も経たな

うちに大きく変わっていきます，赤レンガ等の懐かしいものが残され，現代風にアレンジされ利用されているということをお聞きいたしますと，前回は申し上げましたが今の施設の残せる部分については残していく，そうした意識も大事ではないかと思っています。

北尾委員 荒川委員の言われたように，複合的なものが良いと思います。

例えば病院，行ったら病気になるような病院では困るので，行ったら治るような，病は気からということもありますので，明るく心の和む空間，アートがあり，綺麗なホテルがあり，それから若者がいるというような活気ある空間になると良いと思います。

そういう面では，京都は 50 の大学があり，常に 15 万人の学生がいて，さらにアジアから留学生を呼ぶという。京大と同志社と立命が国から国際化拠点として指定を受けていますので今後留学生が増えていきますし，そういったときに京都外大と隣接してるといのもとても良い。今回，京都経済同友会で，京都の大学をどういう形で活用したらいいのかということを検討する委員会を立ち上げました。そこで今度，フランスの国際大学都市というものを見学に行くことになっています。国際大学都市というのは各国が自国のパビリオンというか寮を自前で作り，そこに自国の留学生を優先的に留学してもらって，広く国を知ってもらおうという施設で，日本の日本館というのがあって政府機関，官公庁もかかわっています。日本も ODA でたくさんの開発費用をそういうところに出しているわけですが，そういうお金を例えばベトナム館だとかシンガポール館だとかインドネシア館などをその国と協力して，山ノ内の一角に作るということも 1 つの案かと思います。そういう形で留学生あるいはそれに見合った施設ということの中に，医療関係のもの，あるいは芸術関係のものなど様々な施設を整備すれば良いと思いますが，ただ，先ほど，私立大学の医学部をとということを申し上げましたけれども，そう簡単に立地をしてくれるわけではありませんので，そういう面では市民ぐるみでそういうものが必要だということを発信していく必要があります。国公立大学では国や地方自治体から新たなお金がなかなか出てこない。私学であれば，ある面ではまだお金を持っている 1 つの法人ではありますので，その資金をうまく利用し，私学を誘致することにより国公立大学とではなかなか難しい産学交流というのがもっと進むのではないかと思います。また，京都は付加価値の高いもの作りを行ってきました。そういった面で，分析機器や医療機器等の先進的なものを作ることに寄与できることも大切かと思っています。ちょうど，あの地域にはそういった会社が沢山ありますので，医療関係の大学が出来ると活発に色々な研究が進むのではないかと思います。そういう場所になれば海外からも有名な学者等，色々な人々が沢山集まる可能性も出てきます，そういった時に日本の心や芸術等を紹介する機会ができる施設があっても良いと思います。荒川委員が言われたように様々なものが複合的にあり，その中にいろんな人が集まれるというような地域にしていくのが良いのではないかと思います。そういった面で，核になる施設として，今比較的

資金力があると思われる私立大学を誘致することも 1 つの考え方ではないかと思っております。

竹山委員 先ほど、この参考資料 1 の文教分野の政策目標をそのまま、まさにこうだなどと思って読み上げたのですが、実はその下の業務分野「京都のまちに脈々と受け継がれてきた匠の技、企業の持つ優れた技術力、知の集積拠点である大学など、これまで築き上げてきた「京都力」を活かした「ものづくり」により、京都ならではの産業振興を進める」、という記述も重要です。産業振興まで行くかどうかは難しいかもしれませんが、細やかな職人技も含めた、京都の街に根ざし、京都のこれからを担っていく人達が働いてもらえる場所というのが併設されると良いですね。文教分野あるいは芸術分野と言っても、文教・芸術は直接にお金を生むものではないです。しかし、そこにオフィスなり、物作りの研究所なりがあると恒常的な収入になるのではないのでしょうか。と言いますのも、私、都市計画マスタープランの作成委員させて頂いておまして、その時も申し上げたのですが、京都大学で大変優秀な学生たちを教えておりますが、その学生のほとんど全てが東京や大阪に出て行きます。京都にはほとんど残りません。何故か、働く場所が無いのです。もちろん島津製作所や三菱自動車とかそういったジャンルのところで京都ということもあるのかもしれませんが、基本的には京都で働く場所がないというのが学生たちを外へ向かわせています。特に私が教えている建築の分野では大企業を志望する学生というのはそれほど多くは無いものですから、出来れば京都でそのまま働きたいという学生も多いです。その初心を貫徹して京都で事務所をやっている教え子たちも何人もおります。ただ、大変なかなか家賃も高く、なかなか仕事の環境もいろんな意味で難しく、ビジネスチャンスがやはり東京にあることが、流出していく理由だと思います。これまた都市計画マスタープランの時に申しあげたことですが、京都という名前がつく大学に全国から学生がやってきます。その時に京都ファンになる学生がほとんどです。私もそうでした。しかし、社会に出るときに京都を出ざるを得ない。心は京都にあるけれど、外に出ざるを得ない。金を稼げないから、働く場所が無いから。そういった学生が、ベンチャーでも良いですから新しいアイデアを京都のもの作りと絡めて作っていく。そして、芸術の分野ではそういう人達が大変多いと思いますが、京都に根ざして京都をこれから作っていく、支えていく、文化都市京都を作っていく。そういった人達の為のベンチャーのオフィスが置ける場所ですか、そういった物を発表できる場所とか。そういったことと様々なプログラムを重ねてこの跡地利用を考えていくのも、重要なことでしょう。先ほど申し上げました過去の記憶を残していく方法というのは、ちょっとずつ色々な事を変えていくというやり方もあると思います。財力ある誘致主体が無い場合は、お金の問題もあります。ちょっとずつ変えていった例が、先ほどの上海でのいくつかの例です。上海でも大きな資本が投下される場合は、全部きれいにして全く新しい超高層ビルが建ちます。それはそれで新しい活力にはなると思いますけれども、

今回のように、大変深い穴が沢山掘られている浄水場跡地であるという敷地の条件があり、もしそれをうまく活用して、あるいは更にそこに新しい建築物や空間を絡めて、技術、芸術、文化を基本として、さらにビジネスや医療などと結び付けられるのであれば、その方が投下資本としては、少なくても済む。長い時間を込めて、徐々に軌道修正しながらのほうが、じっくりと未来を見据えた京都のまちを作り上げていけるのではないかというような思いも半分はあるのです。と申しますのも、当然何十年という先を見定めて誘致をするのですが、昨今の経済状況だといつ何が起こるか分からないからです。今はやはり、ある程度短い期間での成果を視野に収めつつ、ちょっとずつ、5年ずつとか成果を見ながら軌道修正していくのも手かなとは思っています。私の設計しました中に、たいへん成功した対照的な二つのホテル事例がありまして、1つは箱根の「強羅花壇」、これは世界中からお客さんが来ます。もう1つは、山代温泉の「べにや無何有」。どちらも大変客単価の高い旅館ですが「強羅花壇」は一気に資本投下して、大改築と申しますか、ほとんど新築して成功した例です。1989年に出来て、21年経っても客足は衰えません。少しずつ改装はしますが、基本的なコンセプトをきちんと立てれば長持ちするという例の1つです。ところが、「べにや無何有」は、最初は新築ということで計画をしましたら予算が足りないということで、4回に分けてすこしずつ改装しました。1995年からほぼ3年おきに改装しますと、ちょうど社会の激変にうまく対応して阪神の震災後の客層の変化もうまく乗り切り、その後様々な経済状況の変化も乗り切り大変うまく軌道修正して、今、これまた予約がほとんど取れない旅館になっております。基本的な条件としては、大きな投資主体が動く場合は、これは大規模で長期視野で一気に作ると思いますが、そうでない場合は、細やかな計画をして少しずつ先に進んでいくというやり方もあるのではないかなと思っています。

土井座長 ありがとうございます。私も皆さんのお話を聞きながら思うところを少し述べたいと思います。立地する機能というものに入る前に、少し皆さんのお話を私なりに考えました、1つはキーワード的なものを整理しておいて、それに合わせる機能というものを考えたのですが、前回もお話したのですが、山ノ内は非常にアクセスがよく京都駅から18分で来られる場所です。京都の中で施設を考えるのも大切ですけれども、さらに広域的に人々を集める可能性というのは凄く高い。ですから、今まで京都に足りなかったものを広域的に集める施設にしてはどうかと感じています。また、これからの時代のことを考えていくと、時代は何を求めているかということを見通しておく必要があると思います。

医学部の話が出てきましたが、医療も含めた健康に対する人々の思いは強いものがありますし、国の高齢福祉予算が大変高額であることからいっても、健康に対するお金は非常に沢山使ってきているといえます。ところが、最後まで健康で幸せな人生を生きる

れるかといったら、なんとなくですが、そのように感じない。出来るだけ健康な余命を人々が保つためには何をすべきかと言うことを考えていくべきなのではないかと思っています。京都大学の医学部には医学科と保健学科の2つの学科があります。山ノ内に本当に医学的なものがあるのか、それとも予防医学的な健康を支えるような仕組みを考えるほうが良いのかというのをずっと考えていたのですが、やはりこの場所では予防医学的なもののほうが良いのではないかと思いました。予防医学的なものであれば、例えば工学部が技術を提供するとか、アメニティとしてアートをうまく組み合わせるとか横の広がりが出てくると思います。ですからコアに健康、あるいは予防医学的なものを入れ、それを中心にアートであるとか、その他の複合的な機能を作っていくというようなことがあると、新しい、もしかしたら関西ではあまり無いような物が出来る可能性があるのではないのでしょうか。ですから、健康とアートをうまく組み合わせた予防医学的なものという考え方もあるのではないかと思っています。

もう1つ、キーワードとして、人々が話し合える場所というものがとても大事だと思います。私たちの人生の中で必要なものは何かについて、交通計画でずっと考えているのですが、その中でも、人々は話し合うために行動しているという事例が沢山あります。昔は話し合う機会として井戸端会議がありましたが、現在では、そういった場所がなかなかありません。そういった意味では人々が自由に集まって語り合える場所を作ってあげる必要があるのではないかと思います。山ノ内は京都駅から地下鉄で18分で来られますし、都心にも近く人々が集まりやすい場所にあります。ここに人々が集まって話し合える空間、例えば、アートやおいしい食事等の付随的な機能を複合的に持たせて、人々に来てもらう、語らいに行くとはなかなか言いにくいので、アートを見に行くとか、おいしいものを食べに行くとか、人々に来てもらうような、そういった場所にできたら良いと感じています。また先ほど竹山委員が言われたような、メディアアートの様なもので、敷居が高いものと低いものが複合し、老若男女問わずどんどん来てもらえる施設になると良いと思いました。

ワクワクできる、人に夢を与えるような施設になるという夢のある部分を、委員会からの答申に書き込んでいくことによって、実際に施設を作られる方に、人々に夢を与えられる施設を作るんだという意識を持ってもらえるといいことだな、というのが皆さんのお話を聞いて感じたことです

更にもう少しご議論を、荒川委員は最初にお答えいただきましたが、お話を聞かれて思われたことがあれば、是非お願いします。

荒川委員 以前学生の卒業制作を指導しておりました時に、佐賀の嬉野出身の学生が、出身地の温泉がひなびてしまって人が集まらない、それをなんとかできる計画を作りたいということを書いてきました。その学生と相談して、まさに先生が言われたように健康をテーマにしたまちづくりをしてはどうか、今、中国の富裕層が日本に健康診断を受け

に來られていますので、人間ドックのような物と、それに温泉、おいしい食事、観光等と組み合わせることができればそういった富裕層を集められ、とても良いなと話しました。

京都であれば、人間ドックを受けに行くということをして日本中から、それこそ健康な人々が集まってきて医療チェックを受けて、おいしい京野菜のお料理を食べたり、温泉も掘れば出るかもしれませんし、観光も含めて精神的なバランスを取り戻して帰ってもらう、そういったプログラムができるのではないかと、そういうもののベースになる場所を作ることでもできるのではないかと思います。

木村委員 新たにオフィスを作るといいますが、京都のオフィスの需要と供給バランスを鑑みると、入居需要がそう伸びないように思われます。

大阪等でもプロジェクトが動いていますが、新たなオフィスができると既存のオフィスが空くというように、国内で取り合っているような状況です。不動産の市場を伸ばすためには、日本の企業が海外に進出されているように、逆に海外、特に中国の企業を京都へ誘致することができないかというような仕掛けも必要かと思います。

話が変わりますけれども、先ほどから、今注目を浴びている「未病」というキーワードが出ていますが、海外のスタンフォード大学では総事業費 3500 億円の 3 分の 1 を病院が稼ぎ出していますので、やはり医学部や病院は大変経済波及効果が高い施設のひとつであることは間違いないと思います。

竹山委員 木村委員の言われる大阪のプロジェクトは超高層ビルのオフィスを想定されていると思いますが、上海でも、勿論超高層ビルのオフィスは沢山出来てきていますが、先ほどお話した製鉄所の跡地には 1 階にギャラリーがあり、その上の 2 階 3 階に入れ子構造で小さなスペースがあり、そこをオフィスとして使っています。

同様に、京都ならではの 2 層 3 層くらいでの建物で、1 階はパブリックスペース、2 階 3 階にいくつかの小さなオフィスにもなるようなスペースを作って、そこでベンチャー的に活動してもらえば、建物もローコストで出来ますし、効率よく使うことが出来ます。そこに、将来、京都で、すごいお金を稼ぎ出すような企業を生み出すような若い人達に入ってもらおうという程度のもので良いと思っています。

これは、誘致候補施設の面ではなくて、政策目標の方ですね。物づくりにより京都ならではの街の集積拠点をというイメージです。

土井座長 島津製作所は京都大学の医療機器とか実験機器を作り先端的な技術を身に付けて大きくなって行きました。

同じように、今回ここで出来る施設に対して産業クラスターが出来ていくような、あるいは今までのものの枠を更に広めていくようなものであれば、自ずと大きく動いてい

けるかもしれません。

竹山委員 既に木村委員がやられていることですが、やはり京都は様々な若い才能のある人達、様々なジャンルの人達が集まっていますから、彼らが横断して活動できるような、まず出発点として起業の拠点になるような場所であり、しかも多くの人が外からやって来るような施設が出来ると良いなと思います。

荒川委員 浄水場の跡地ですから、がらんどうの空間の中に少しお金をかけてフロアを作っただけで、竹山委員の言われるような、小さなオフィスのようなものがそのまま作れますし、しかもそれが御池通に面して両側にありますので、この地区はこういう地区だよということを皆さんに知ってもらうのに非常に良い広告塔になるのではないかと思います。夜でも明るく若い人達が一生涯懸命働いたり、研究したりしているような姿が通りから見えていると、なんか凄く街が活気に溢れたような印象が出てきますし、山下委員の言われた、人通りを増やして欲しいということにもつながるのではないかと思います。

竹山委員 既存の建物がそのまま使えるかどうかは、いろいろと難しいところがありますが、地下の巨大なプールは面白い空間です。4 m以上の深さがあって、100 mくらいの長さがある。先日初めて浄水場の中を見学して、あの空間の水が全部抜かれたらどんな空間が出来るのかとゾクゾクしました。プールを撤去するのに多額の費用が掛るとすれば、このゾクゾクする空間をうまく利用して、その中にガラスの箱を浮かべれば、医療施設でもアートセンターでもオフィスでも、何でも作ることができます。さらに、そこに向かって降りていく体験はすばらしいものでしょうし、世界中から人を集めることが出来るのではないかと思います。

外国人の友人たちも日本に来ると、必ず少しは京都に来ます。京都での出発点は、社寺仏閣等の古い遺産です。でも、若い人達には何となく飽き足りない、京都で何かアクティブなものが無いかと立ち止まるわけです。その時、京都駅からすぐの場所に、全く新しいクリエイティブな施設があれば、世界中から若い人達が集まります。

土井座長 右京には世界文化遺産が4つあります。1つあるだけでも凄いことですから、その右京区のほぼ真ん中くらいの位置に山ノ内浄水場があるので、今言われたことは両方可能ですね。

竹山委員 実は、医療デザイン研究会を関西学院大学や有識者と一緒に立ち上げました。医療の中で患者の視線に立った建物が少なく、快適な医療空間が無いのでそれを考える研究会です。アートとかデザインが絡んだ空間が少ないので、そういったアーティスト

やデザイナーと一緒に計画された空間であればおそらく大変多くの人達がここに来たいという気持ちになります。年老いたとき時にどういう空間に居たいかといいますと、まず健康的には安心なサポートがあり、音楽とアートと本に囲まれた空間で過ごしたいというのが私の感覚なんです、これは多くの人達にも当てはまると思います。アートギャラリー等には若い人達が沢山来ています。恐らくこの山ノ内でアートの、あるいは文化芸術的な施設を作っていけば、未来に価値が生み出される新しいアートの創造になるだろうと思います。

そうなる世界から、若い人達が集まり、活気が出てくる。私は若い活気というのは、健康にプラスになると思いますから、結果として全世代のための施設になっていくのではないかと感じます。

今の施設はなかなか面白い施設ですが、仮にそれを利用するとしても、今の施設をそのまま保存すれば何か面白いことが出来ると言う事ではなく、今の施設が持つポテンシャルをうまく利用し、不備は大きく改修して施設を作っていく必要があると思います

山下委員 竹山委員が言われたように、浄水場は地下に深く掘りこんだ施設です。あの施設を撤去するとなると大量の廃棄物が出てきますし、そこにまた同様なコンクリートを持ってくることになると思います。私は前回、今の施設を活用して地下に居酒屋みたいなものを作ってもいいのではないかと申し上げたわけですが、今ある施設を単純に壊すのではなく、有効に活用していく方向性が必要なのではないかというのが私の思いです。

それから、医療関係の話が出ていますけれども、確かに病気になったときに治療できる最先端の医療施設も必要ですが、それ以前に病気にならないための予防医学がこれからはもっと前面に出てくるべきですし、その需要をターゲットにするべきではないかと思っています。

そこで、特に北尾委員にお聞きしたいのですが、今京都でそういったことをやろうという気持ちのある企業はあるのでしょうか。

北尾委員 京都は日本の中でも特別だと思います。京都を一地方都市と見る中央官僚も多いことは事実ですが、間違った認識です。京都は特別な都市だという認識を国に持ってもらう必要があるという思いで働きかけています。京都は外国から見ても魅力的で、例えば、学会も京都で開かれるなら参加しようという動機にもなりますし、京都の企業と一緒に仕事をしたいという需要も有る、そういった気持ちを喚起できる都市であることはまちがいありません。ですからやはり日本の中で京都を特別な都市として位置づけ、国益のために京都をどう活かすのかという事をもう一度考えてもらわないといけないと思っています。

京都の企業は、京都でがんばっていこうという思いが強く本社を東京に移すところは

ありません、そんな気持ちになる都市は京都だけだと思います。しかも、大学が沢山あり、ベンチャー企業が生まれる可能性も大いにある。また、木村委員のところで取り組まれているように、企業にとって京都は非常に産学連携しやすいまちですから、そういう部分をもっと広げていって、連携を深めていける可能性があるのではないかと思います。

ただ、残念ながら、大学と市民との間に壁があるように感じます。昔、京都はまちぐるみで学生を学生さんと呼んで非常に大事にしていた、その心が残っている間に、大学との壁を取り除き市民がいつでも出入り出来る、例えば学内の緑を市民の憩いの空間とするなどですが、そういった活動を通じて市民と大学とか一体になって京都を活性化させていく過程で、京都独特の企業が生まれるのだと思います。過去には、京セラであり村田製作所であり任天堂でありワコールであり、京都の地場の産業が基か、大学の先生方の支援の下に起業、発展した会社ばかりです。ですから企業はもっと京都の為に投資をすべきだと思っています。

山ノ内浄水場跡地については、少子高齢化の中で、安全安心なまちづくりの中核になれば良いと思いますし、健康をキーワードにして京野菜を育てる施設を作り、その京野菜を使ったイタリアンや京懐石を手ごろな価格で食べられる、また京料理を自分で料理する体験が出来るような施設になっても良いと思っています。

竹山委員 議論のテーマが医療とか芸術とかに行っていたので言いそびれましたが、ここは水を扱っている場所ですから、浄水場だったという水の記憶は永遠に残ると思います。疏水で結ばれた「蹴上」と一体化してエコミュージアムと考えてもいい。地下鉄でも東西線で一本です。しかも京都は水の街です。水がキーワードです。酒は水で出来ています。昔、日本中の酒が飲めるという酒場に行って感動したことがあります。世界中のありとあらゆる酒を集め、あの水を抜いた後の地下の空間に長い長いカウンターを作って酒瓶をずっと並べた酒場があれば、どうでしょう。私は絶対に行きます。そんな風なアイデアもありかなと思いました。

土井座長 お酒は、お酒が好きな人だけが飲むのではなくて、お酒を口実に人々が話をする場になりますから、自然に人々が集まって来る、そして会話をします。それは、人生最大の楽しみの1つですね。

私も皆さんの話を伺っていて、この場所に何かを誘致する時も、商品価値が高いことをアピールすることが必要で、今お話があった水の記憶もそうですが、ここの場所の特徴というべきユニークな点がいくつか出てきています。その1つに京都駅から非常に近いというロケーションのことがあります。また、予防医学の面から言うと緑、自然と触れ合えることとても大事なことです。その意味では、山ノ内は敷地内だけでなく、地下鉄東西線や嵐電のネットワークを使い、嵐山、二条城、鴨川、岡崎、東山、果ては琵琶

湖まで行けて、緑と触れ合える、とても価値の高い場所です。ですからこの様なこの土地が持っている力、機能をうまく説明し、これだけ価値が高いところだということをアピールしたうえで、誘致をする必要があると思っています。

委員の皆様のご専門の立場で、文教と医療、アート合わさったものという議論がありますけれども、それをもう少し論理強化する、あるいはこれからの見通しなどをお持ちであればお話いただきたい。

北尾委員 京大での、森田先生の「運動と健康」という授業が学生に大変人気が高いことから分るように、予防医学はこれから注目を浴びていく分野だと思います。そういった運動と健康や緑の空間等を複合的に組み合わせることは大変魅力の高いものだと思います。

ただ、ホテルは、京都にとって無くてはならない物ですから、例えば、ホテルを立地するとすれば、市として高さの規制を緩和する可能性があるのか、市の見解を教えてもらいたい。

事務局 門川市長から諮問させていただいた中に、この地域にふさわしい用途地域、建ぺい率、容積率、高さ規制等がございます。ですから、全く緩和できないと申し上げるつもりはございません。ただ、都市計画の制限を変更する場合、都市計画審議会でも、変更する理由、経過等を十分に御説明しなければなりません。このため、周囲の制限との調和等の事柄やこの場所に立地する機能の公共性なども踏まえた合理的な理由が必要であると考えています。例えば高さ 100m でも構わないということなどはできません。

都市計画局としては、この委員会でも都市計画の規制についても御議論いただき、可能な限り対応させていただきたいと考えております。

土井座長 仮に高さを緩和したとしても、この場所は現在工業地域で容積率が200%ですから、高さを活かしかねないことも考えられます。ですからここにふさわしい機能、用途に応じた、高さ、容積率、建ぺい率を考えていくことが重要だと思います。

北尾委員 数値的な規制とは別に、建物の風格も問題になると思います。今、ショッピングモール等の集客施設が沢山できていますけれども、もちろん経済性を考えると仕方がないことかもしれませんが、建物に品が無い場合が多いと感じています。

そのような建物ではなく、後世に残るような風格のある建物が立地すべきです。私が大学をと申し上げているのは、大学であれば風格のある建物を建ててくれることを大いに期待できるからということも理由の一つです。

風格のある建物と申し上げましたが、レトロ風であったり、赤レンガ調であったり、もちろん京都ですから町家的なものも重要ですが、それだけではなくて、新しいものも

融合しておしゃれなものが、コンペ等をして若い人達の感性も取り入れながら出来ると良いと思います。

土井座長 今までの議論を少しまとめさせていただきたいと思います。

資料 1 をご覧ください。前回の意見を基に作っていただいた資料ですが、機能に応じて施設を文教・研究機能，医療・都市機能，観光機能・その他に分類されています。大学という意見が多いですが，今日，主に議論に出たのは健康関連の大学を中心に，アート系施設，宿泊施設等の人々が集まれる複合的な施設でした。

次回の委員会に向けて，どの施設がどの程度，地下鉄増客や経済的に効果があるかを調べてもらうことにしたいと思いますが，比較検討できる形で調べないと意味が薄くなりますので，大学とアート系施設，宿泊施設，健康施設を調べる。大学は普通の文系大学と健康系大学といった様な比較が出来ればよいでしょうか。

他に調べる視点等についてご意見ありませんでしょうか。

竹山委員 どのような事業にするかは，当初にどのくらいのコストがかけられるかによって，実現可能性が変わります。大再開発，既存施設を全部撤去して，更地に巨大な建物を建てるのと，今の施設を活用して必要などころを変えていくということだけでも出発点が違いますから，今，機能を絞った段階で実現可能性を計ることは難しいと思います。

土井座長 ここで言う試算モデルは，竹山委員の言われた費用面の話ではなく，どの程度の効果，大学なら学生何人，病院なら何人といった，オーダーを見るという話だと思うのですが，その辺りは事務局に説明をお願いします。

事務局 まず，参考資料 1 にお示ししているものが，機能別のメリット，デメリットを庁内関係部局でまとめたものです。しかしこれは，データに裏打ちされたものではありません。庁内関係部局での会議で議論して，関係する政策との整合性であるとか，今後の京都市の向かう方向，それから最重要課題である地下鉄の増客，それに伴う経済への波及効果，そういうものを書かせて頂いております。

それを補うため，精密なモデルを想定するのは難しいですが，敷地に対して想定出来るモデルを作成し，効果を試算したデータをお示しすることにより，分野ごとの効果，メリット，デメリットをデータに基づいて比較検討ができる一つのツールとして，立地を誘導すべき施設の絞込みに役立てていただきたいと思いますと考えております

また，民間活力の利用を原則としておりますので，当然，需要が無ければ実現性というものは乏しいものでございますから，シンクタンク等への需要動向調査や，実際の需要調査等を実施することを考えております。

土井座長 この参考資料 1 を，定性的な記述から定量的な記述にしたものということですか

事務局 そうでございます。モデルを作成しなければ，例えば仮に税金等を試算するにしろ，地下鉄の乗降客を試算するにしろ，比較はし難いだろうと考えております。

土井座長 例えば，46000 m²のうち20000 m²に大学を立地させるとして，面積や，容積に応じた床面積に対して，学生や職員が何人くらい来るだろうということを想定していくということですね。

事務局 そうでございます。ただし，あくまでもモデルですので，複合施設のような複雑な要素をモデルとして作成できるのかについては検討が必要ではないかと思えます。

土井座長 複合が難しければ個別に効果を算出するということですね。

事務局 進め方については検討したいと思えます。

土井座長 この調査で出てくる数字というのは，事業主体の意欲は入ってきませんね。むしろ事業主体の意欲の方が重要で，そういった人達の意欲を喚起していける答申を出すのが一番大事だと思います。

ですから私たちが今議論している内容が京都の未来には取って大事だと市民の方々に共感してもらえるものであればそれはそれで良いと思えます。でも市役所としては，一定根拠というものも積み上げていかないといけないということですね。

竹山委員 市民への説明責任が果たせないということでしょうが，そこで出てきた数字はそれほど信用できるものではないと思えますが，京都の未来に何が必要なのかということをも皆で考える機運ができるのかもしれないですね。

ともあれ，ここは右京区の施設ですが，全京都のみならず，全日本，全世界の施設になれば良いと思っています

土井座長 私たちが議論した，この熱をできるだけ反映，吸収した答申ができたなら良い。何かの施設，例えば大学というだけでなく，定性的な言い方が良いかは分かりませんが，夢のある施設や世界と勝負できる施設といった，思いを実現していただけるような答申をまとめられたら良いと思っております。

竹山委員 もし、どこかの私学の雄がここで責任をもって医学部をやると行ってくれるなら素晴らしいことだと思いますが、単一施設にしてその施設にここを全部任せることは危険も大きい。今の時代は単一企業・単一施設をドンと引き入れるというのは難しいかもしれない。だから複合施設にする、いくつかの施設を組合わせて、総合的に市民の健康の向上、地下鉄の増客、生活の質の向上といったものを目指す、それがそれほど思った効果を上げない時には、より意欲のあるところを探してくる。とにかく京都に長く根ざしてやる気のあるところを発見していくプロセスが大切なのだと思います。

土井座長 時間も迫って参りました。次回は先ほど事務局のほうから説明があったように、モデルを作って効果を調べてもらいます。今日、簡単なまとめをしましたがそれでもそれについてもう少しご意見いただきたいと思います。

荒川委員 具体的にこれを作れば良いということの前に、これが出来ることによって京都に住んでいる人達、それからここを訪れる人達の生活の質というのを高められるものを作るということが大事ではないかと感じています。それはもちろん医療という直接的に健康ということに関わるものや、アートのように生活に潤いを与えてくれるものでもあります。そういった、人が人らしく生きていくために大切にすべきものは何かということを考えられるような場になると良いなと思いました、とても抽象的で申し訳ないですけども。

北尾委員 京都はもともと大変複合的な都市だと思います。同じ古都である奈良と比べても、産業も文化も色々なものが渾然一体となって今の京都は出来ています。そういった状態が凝縮したような形になれば良いとそう思っています。そのコンセプトに少子高齢化の中で健康というものを中心に置くというのがとても良いのではないかなと思っております。

木村委員 建物に何かワクワクする遊びの部分が少なくなっていると、最近感じています。海外の研究所なんかですとシースルーのエレベーターの上に人形が乗っていたりします、そういうなんとなく楽しい、ここでいうと通りに面したレトロな部分を残すとかそういった部分も必要ではないかと思えます。

山下委員 この解体費用は相当な金額になると思いますが、どのくらいになるのかが少し気になります。

京都は冷泉であれば結構沢山出ています。ですからここでも掘れば出てくるのではないかと思います。そういったプラス要素を事業者選定に向けて提示していかなければいけないのではないのでしょうか。

あと、土地が御池通を挟んで南北に分れていますので、関連して一体的なことが出来れば一番良いのですが、どちらか片方からやっていくのも1つの方法ではないかとおもいます。特に前回申し上げましたが、今は土地を売る時代ではありません、ですから、ある部分では京都市が事業主体となってもらうことも一つの案だと思います。

竹山委員 場所の記憶をきちんと継承していくような施設になって欲しいということ、世界中から人々が集まる施設になって欲しいということ、それから京都で起業する人達をサポート出来るような施設になって欲しいということ、その3点です。

土井座長 皆さんご意見ありがとうございます。前回から比べると非常に絞ることができたのではないかと思います。

今日の議論で出てきた大学は健康、予防医学的なものでしたが、それだけではなく、議論に出てきた他の施設、アートやホテルなどを漏れなく、経済波及効果等の調査をしていただいて、総合的にどうしていくかといった議論を、出していただいた数字を基に感覚的な話を現実に基づいた話に詰めて行きながら、次回できればと思います。

以上、簡単なまとめとして、これからの進め方を提案させていただきましたが、委員の皆様いかがでしょうか。ありがとうございます。

それから事務局にお願いですが、次回までに、浄水場の撤去にかかる費用について判れば教えていただきたいと思います。

では、議題1は以上とさせていただきます。

次に議題2、その他ですが、事務局からありますか。

事務局 特に、議論の中で新たに議論するものがあればということで、その他にさせて頂いております。

確認でございますが試算モデルの具体的なものは、土井座長と相談させて頂くということでもよろしいでしょうか。

土井座長 わかりました。

それでは、以上で第2回の検討委員会を終了させていただきます。

皆さん活発なご議論ありがとうございました。何か目の前が晴れてきた気がしました。お疲れ様でした。

了

大学のまち京都・学生のまち京都 推進計画

概要版



京都市・財団法人大学コンソーシアム京都

「大学のまち京都・学生のまち京都推進計画」

京都市長

門川 大作



京都のまちは、山紫水明の自然と調和した優れた文化を創造するとともに継承してきた1200年を超える悠久の歴史を持つ世界に誇る「文化首都」です。

京都が今日でも、こうした個性と魅力あふれるまちとして、独自の地位を占めているのは、京都が持つ知恵と力、即ち京都力を活かして、伝統を守ると同時に、進取の気風により、常に創造を加えてきたためであります。そして、その土台となるのが大学をはじめとする知の集積であり、ノーベル賞受賞者を数多く輩出するなど、世界を代表する学術研究都市であったからこそであります。

こうした「知」をさらに深め、未来へと発展させるため、京都市は、大学振興を市政の重要な柱の一つと位置付け、先駆的な取組を展開してきました。

平成5（1993）年には、21世紀に向けた「学問のまち、大学のまち・京都」の将来像を示す「大学のまち・京都21プラン」を策定し、平成10（1998）年には、我が国で初めてとなる大学コンソーシアム京都を設立。さらに、平成16年4月には、後継計画として、「大学のまち・わくわく京都推進計画」（計画期間 平成16年度から平成25年度まで）を策定し、平成20（2008）年3月までに、すべての事業に着手するなど、着実に取組を推進してきました。

一方、平成18（2006）年12月の「教育基本法」の改正に加え、大学教育も含めた「教育立国」の実現に向けた国の指針となる「教育振興基本計画」の策定、急激な少子化に伴う大学入学人口の減少や定員割れの大学の増大等、高等教育を取り巻く状況は、大きく変化しています。

そのため、京都市と財団法人大学コンソーシアム京都は、協働で、「大学のまち・わくわく京都推進計画」を一新し、更に、「大学のまち」の推進から、学生が生き活きと輝き、京都の大きな力となる「学生のまち」を目指し、この度、「大学のまち京都・学生のまち京都推進計画」を策定しました。

今後、京都市と大学コンソーシアム京都とは、大学、学生、企業、地域、NPO等の皆様とも連携し、この計画を着実に推進して参りますので、市民の皆様のより一層の御理解、御協力をいただきますようお願いいたします。

結びに、計画策定に御尽力を賜りました「大学のまち京都推進会議」、同サポーティング・グループ、新計画検討委員会の委員の皆様をはじめ、関係団体の皆様、多くの御意見をお寄せいただきました市民の皆様には厚く御礼申し上げます。

平成21年2月

策定にあたって ― ご挨拶 ―

財団法人大学コンソーシアム京都

理事長 八田 英二



京都には、市内を中心に数多くの大学・短期大学が集積しています。その都市特性を活かすため、京都市と大学を中心とした産学公の連携により、全国で初めての大学コンソーシアムが設立されました。この間、前身の京都・大学センターから数えると15年間にわたって、各種の先駆的な取組を進めて参りました。

現在、大学は学生数の減少をはじめ、国際的な競争の激化など、厳しい現状となっております。また、大学設置基準の大綱化に端を発し、大学の質保証における第三者評価制度の導入、FD（教員の教育力向上）の義務化などの課題、入学する学生の多様化に伴う初年次教育の必要性、大学の国際化を目指した留学生受入れの推進など、大学を取り巻く環境は激動しております。

このような状況に対応するため、大学では、それぞれの特徴・個性を活かした魅力・教育の質の向上に努めているとともに、個別に競争的な取組を進めるだけでなく、「大学のまち京都」として京都地域全体の魅力を高めることが必要であるとの認識から、大学コンソーシアム京都が中心となり、京都の大学が一丸となって各種取組を進めてきたところです。

しかし、現存する様々な課題を解決するためには、大学の力だけでは実現しないことが多数あります。京都市をはじめとする行政、経済界、地域の方々などの協力が不可欠であり、まさに京都が一丸となって取り組んでいく必要があります。

また、大学側からの社会貢献という視点も重視されており、研究・教育に続く大学の第3の使命として地域貢献が求められています。京都の大学の「知」の財産や、学生のエネルギーを活かしていただき、「大学」と「京都のまち」が相乗効果を生み出して、お互いを高め合えるようにと期待するところです。こうしたことから、大学コンソーシアム京都においても、新ステージにおけるミッションを「「大学のまち京都」ならではの新しい地域連携モデルを活かした高等教育の質の向上」として掲げ、新たな取組を展開することとしております。

この計画は、京都市とともに、産学公地域の皆様との熱心な議論、協働作業により作成したものであり、「世界に誇る「大学のまち」「学生のまち」」の実現に向けた、これから5年間の道しるべとなるものです。計画を推進するなかで、京都の魅力をさらに高め世界に発信していくこと、「大学のまち京都」が一層輝きを増していくことを強く願っております。

結びに、計画策定に当たり、様々な御尽力・御支援をいただいた、「大学のまち京都推進会議」委員の方々をはじめとする関係者の皆様に厚くお礼を申し上げます。

平成21年2月

「大学のまち京都・学生のまち京都推進計画」の構成

計画の
特徴

1. 初めて、京都市と（財）大学コンソーシアム京都とが協働で計画を策定し、推進します。
2. 従来の「大学のまち」に加えて、「学生のまち」の推進を図ります。
3. 国の「留学生30万人計画」の方針を踏まえ、本市においても留学生倍増（1万人）を目指します。

第Ⅰ編

これまでの
「大学のまち京都」推進
への京都市・財団法人
大学コンソーシアム京都の取組

第Ⅱ編

「大学のまち京都」
「学生のまち京都」
の意義

第Ⅲ編

「大学のまち京都」を
取り巻く
状況と課題

第Ⅳ編

目指すべきビジョン

世界に誇る「大学のまち」「学生のまち」

第Ⅴ編 施策の推進

学生の確保に向けた「学びの環境」の充実

京都で学びたくなる
「大学のまち」の仕組みづくり

- (1) 大学連携による「大学のまち京都」の競争力強化
- (2) 京都ならではの学習プログラムの開発・提供
- (3) 「大学のまち京都」の国内外への効果的な発信
- (4) 京都の景観を形成する大学施設の積極的な整備
- (5) 民間からの寄付による大学支援の促進

大学の国際化に向けた、優秀な留学生等の 受入拡大と国際社会に対応した人材の育成

留学生等の飛躍的な増加に向けた
「広報」「支援」「交流」

- (1) 海外からの優秀な留学生等の増加に向けた取組
- (2) 留学生や研究者等への生活支援
- (3) 京都における生活を豊かにする取組
- (4) 国際社会に対応した人材の育成

パワーあふれる「学生のまち京都」の実現

学生が持つエネルギーによる
「京都力」の強化

- (1) 学生の主体的活動への支援
- (2) 学生のエネルギーを「京都力」向上へつなげる
取組
- (3) 学生の未来に向けた取組

産学公地域連携の推進による京都地域の活性化

産業・地域の活性化、研究成果の活用
に向けた連携強化

- (1) 産学公の連携により、京都の経済を活性化し、
雇用を創出する仕組みづくり
- (2) 大学・学生と地域との連携の促進
- (3) 小中高大(院)連携の推進
- (4) 大学との連携による研究の推進と活用

計画の推進

第 I 編

これまでの「大学のまち京都」推進への京都市・財団法人大学コンソーシアム京都の取組

京都市における取組

・昭和60（1985）年
大学振興の推進に向け、大学問題対策委員会を設置

・昭和61（1986）年
京都市と大学が相互理解を深め、意見交換を行う場として、「京都市・大学事務連絡協議会」を設置

・平成2（1990）年
市役所内に総合的な大学政策に取り組む「企画調整局活性化推進室都市政策課」を設置

・平成5（1993）年
大学と地域の総合的な発展を図る「大学のまち・京都21プラン」を策定

・平成7（1995）年
「京都市大学施設整備支援・誘導制度」の創設と、大学施設整備支援窓口の設置

・平成10（1998）年
産学公連携のもと、我が国で初めての大学コンソーシアムである「財団法人大学コンソーシアム京都」を設立

・平成12（2000）年
京都駅前に「京都市大学のまち交流センター（キャンパスプラザ京都）」を建設

・平成16（2004）年
「大学のまち・わくわく京都推進計画」を策定

大学コンソーシアム京都は、キャンパスプラザ京都を拠点として活動しています。

大学コンソーシアム京都における取組

大学コンソーシアム京都は、「京都・大学センター」（平成6（1994）年）を前身に、平成10（1998）年に設立。

京都・大学センター時代を含む、平成6（1994）年から10年間を「第1ステージ」、平成16（2004）年からの5年間を、「第2ステージ」として、大学連携による取組を着実に推進し、現在、「第3ステージプラン」（実施期間：平成21年度から5年間）策定に向け、大学政策委員会を設置し、検討を行っています。

今後更に、全国の大学コンソーシアムのパイオニアとして、社会的要請の高い教育プログラムの開発と推進を行っていきます。

大学生を対象とした事業 → 単位互換事業、インターンシップ・プログラム など

生涯学習事業 → 「京（みやこ）カレッジ」 など

第Ⅱ編

「大学のまち京都」「学生のまち京都」の意義

学生や研究者、大学の活動は、「京都力」を高める上で、重要な役割を果たしています。

1 学術研究都市としての都市格の向上

大学の集積により、学術研究、文化芸術、国際交流、新産業創出等の発展、大学の国際的な情報発信・人材交流による都市格とまちの魅力の向上への貢献

2 産業・経済効果

産学公連携による産業科学技術振興の促進、大学・学生による経済効果、人材・労働力としての貢献

3 優秀な人材の集積及び輩出

国際的に活躍する人材の育成・輩出による京都の発展への貢献と、留学生の母国と京都との架け橋としての貢献

4 地域の教育力の向上

大学の知的資源による保育所・幼稚園・小中高・統合支援学校等の教育レベルの向上と、市民の生涯学習機会の提供への貢献

5 文化・芸術等の振興

伝統的な技能・技法への先端技術の活用や学生の力等による文化・芸術発展への貢献と、個性あふれる大学の集積による文化首都の地位の向上

6 学生と地域との連携による、まちのパワー向上

社会貢献活動や地域活動への学生の参画による、まちの活力の創出・向上

第Ⅲ編

「大学のまち京都」を取り巻く状況と課題

学生数の減少と厳しさを増す大学経営

18歳人口の減少など、大学の経営を取り巻く環境は厳しさを増しています。

大学の国際化の必要性

国の方針や支援策を生かした、優秀な留学生の受入拡大への取組の強化が必要です。

大学の都心への回帰

大学の京都市内への回帰が進んでおり、周辺環境と調和した大学施設の整備支援が必要です。

未来の京都を担う学生のエネルギー

学生パワーを地域活性化につなげる「京都力」を高める仕組みが必要です。

ICTを活用した大学講義や生涯学習

時間的・地理的制約を受けずに学べるICTの活用が求められています。

京都経済の活性化のための産学公連携の強化

産学公連携による産業振興の推進が必要です。

大学と地域との連携促進

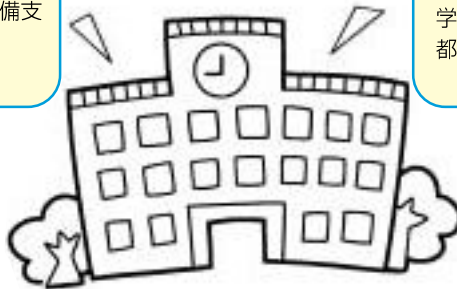
地域の課題解決や活性化につながる、大学と地域の連携促進が望まれます。

京都らしさ、京都ならではの大学の魅力

伝統的な文化芸術や祭り、イベントなどへの参画を通じ、京都で学ぶ魅力を高める必要があります。

「大学のまち京都」の発展に向けた更なる大学間連携の必要性

大学連携の優位性を活かし、国内外への存在感を高めることが求められます。



世界に誇る 「大学のまち」 「学生のまち」

少子化の急激な進行と、グローバル化による国際競争が進む中で、我が国の社会の活力を維持し、更に向上していくためには、先見性や創造性、卓越した指導力を持つ人材を幅広く得ることとその育成が不可欠であります。

また、京都が、将来にわたって、引き続き発展を遂げるためには、学生・教職員の力を高め、大学の知の集積を新産業の創出や芸術文化の創造に活かすことが必要であります。

そのため、この度策定する計画では、国内でも他に比類ない「大学のまち」として、一層の飛躍を遂げるため、京都ならではの「学びの環境」を充実するとともに、産学公及び地域の連携によるまちづくりを更に進めて参ります。

また、「学生のまち」として、留学生を含む優秀な学生等の増加に向けた取組の推進・人材育成に力点を置くと同時に、学生のパワーにより、京都力を高め、未来の京都づくりにつなげていきます。そして、魅力と個性あふれる「世界に誇る「大学のまち」「学生のまち」」の実現を目指して参ります。



学生の確保に向けた「学びの環境」の充実

戦略ポイント

京都で学びたくなる「大学のまち」の仕組みづくり

1 大学連携による「大学のまち京都」の競争力強化

大学連携の力と経験を活かし、各大学の共通課題・事業への取組や、各大学の運営を合理化、機能強化を促進します。

重点

◆ICTを活用した次世代型単位互換制度の構築

各大学の持ち味を活かし、単位互換制度の内容・構成の魅力を更に高めるとともに、ICT（*1）を活用した次世代型単位互換制度の構築を推進します。

◆大学連携による教員・職員の能力向上の取組強化

教員の教育力向上（FD：ファカルティ・ディベロップメント）や職員の職能開発（SD：スタッフ・ディベロップメント）等のプログラムを開発し、大学連携による教員・職員の質の向上のための取組を支援します。

◆大学間の連携による各種イベント等の共同開催の推進

ちょっと注目

ICT活用が生み出す可能性！

ICTの活用は、OCW（*2）、eラーニング（*3）、遠隔授業等の手法を用い、授業の多様化、時間的・地理的条件の解消、広報発信など、様々な側面において、大学講義、生涯学習の発展が期待できます。

（*1）ICT：Information & Communication Technologyの略（ITは、Information Technology）

情報通信技術の略であるが、情報通信におけるコミュニケーションの重要性をより一層明確化するために、平成17年度ICT政策大綱において、ITからICTに表現変更の方針が示された。

（*2）OCW（オープン コース ウェア）

大学等で正規に提供された講義とその関連情報をインターネット上で、無償公開すること。

（*3）eラーニング

コンピューター等、情報技術を用いて行う学習方法。特徴として、教室で学習を行う場合と比べて、遠隔地にも教育を提供でき、また、コンピューターならではの教材が利用できる。

2 京都ならではの学習プログラムの開発・提供

京都が育んできた多様なストックを活かし、京都ならではの学習プログラムの創出と、個性豊かな大学が集積する京都の優位性と特長を活かした学びの魅力を広く発信します。

重点

◆伝統的な文化芸術等京都ならではの学習プログラムの開発・提供

京都の伝統的な文化芸術（歌道、茶道、華道、香道、食文化、雅楽、邦楽、能、狂言等）や、新しい文化・技術（映像、マンガ・アニメなど新しいコンテンツ、ICT、先端技術等）を活かした体験型学習の充実等、京都ならではの学習プログラムを開発・提供するとともに、各分野の第一人者によるプレミアムな講座の開設を検討します。

◆「芸術系大学コンソーシアム」の創設等による、芸術創造都市としての発信

ちょっと注目

新しい京都の魅力、「マンガ」を世界へ発信！

日本は、マンガのメッカとも言われ、世界中から注目が集まっています。

京都市では、平成18年度に、京都精華大学と協働で、京都国際マンガミュージアムを設置し、国内外に向けて新しい京都の魅力を発信しています。

③ 「大学のまち京都」の国内外への効果的な発信

様々な広報媒体や広報手段の活用により、京都ならではのプログラム等「大学のまち京都」の魅力を国内外へ発信・PRします。

高校生への広報・PRの強化や修学旅行の誘致と修学旅行生への京都魅力発信に取り組みます。

◆インターネット等を活用した、高校生への広報・PRの強化

◆修学旅行の誘致と「きょうと 修学旅行ナビ」等を活用した修学旅行生への京都の魅力発信

◆単位互換制度等、京都ならではの学びのスタイル等の、国内外への幅広い広報・PR



ちょっと
注目

きょうと 修学旅行ナビ

(URL) <http://kyotoshugakuryoko.jp/>

修学旅行生の専用サイトでは、修学旅行に役立つ情報が満載！

- 京都の大学、キャンパス体験情報
- 優待施設を紹介する「京都修学旅行パスポート」
- 寺院・神社・文化施設、体験学習に関する情報

④ 京都の景観を形成する大学施設の積極的な整備

新景観政策にも対応した「大学施設整備支援・誘導のためのガイドプラン」（平成20年度末改訂予定）により、京都のまちの景観を形成する大学施設の整備の積極的な促進を図るとともに、京町家等を活用したサテライトキャンパスや活動拠点等の設置を推進します。

重点

◆大学施設整備の支援と誘導

新景観政策にも対応した「京都市大学施設整備支援・誘導のためのガイドプラン」（平成20年度末改訂予定）に基づき、周辺地域の景観やまちづくりに合った施設整備を進めます。

また、地域への開放を促進し、京都の景観やまちづくりに配慮するなどの良好な大学施設の整備に対しては、都市計画上の規制等の弾力的な運用や京都市の市有地の活用などを行い、大学施設の展開・立地を支援します。

◆町家等を活用したサテライトキャンパス等、京都ならではのキャンパスづくりの推進

⑤ 民間からの寄付による大学支援の促進

京都市では、新たな寄付金税制を活用し、大学に対して寄付をされた方の個人市民税の税負担を軽減することにより、大学に対する民間からの寄付を促し、大学振興を図ります。

◆新たな寄付金制度を活用した、大学への寄付の増進

大学の国際化に向けた、優秀な留学生等の受入拡大と国際社会に対応した人材の育成

戦略ポイント

留学生等の飛躍的な増加に向けた 「広報」「支援」「交流」

1 海外からの優秀な留学生等の増加に向けた取組

国の「留学生30万人計画」の方針を踏まえ、留学生倍増（1万人）を目指し、京都の大学の国際化及び優秀な人材の集積のため、留学プログラムの充実、交換留学・姉妹校提携の推進、そして京都のまちや大学の魅力の発信により、留学生、外国人研究者等が京都の大学で学びたいという仕組みをつくりまします。

重点

◆大学の枠を超えた留学プログラムの開発

大学の枠を超えて、コンソーシアム間（大学コンソーシアム京都と海外のコンソーシアム）の留学プログラムを開発し、留学生を確保するとともに、より効果的な留学生受入体制を構築します。

◆海外への発信力強化

京都の大学をPRできる海外イベント等におけるプロモーション活動、英語等のホームページによる留学生等への支援策や留学先を探す際に必要な各大学情報の発信、インターネットを活用したeラーニングによる京都らしい講座の紹介等、世界への発信力を強化します。

◆単位互換制度の充実による英語等による授業の推進

◆海外留学生フェアを活用した、京都の大学のPRによる交換留学制度等の推進

◆留学生や留学生OB・OGからの「口コミ」ネットワークづくり

◆国際会議等コンベンションにおける京都の魅力と大学の発信

2 留学生や研究者等への生活支援

海外からの留学生や研究者とその家族が、京都で安心して満足な生活を送ることができるよう、住宅をはじめとする暮らしの支援に努めます。

重点

◆留学生等への住宅に関する支援

留学生や研究者等を受け入れるため、京都市の市有地を大学に有償で提供する等、大学と連携した住宅の整備や民間の住宅の活用促進につながる支援、短期滞在者向け住宅の提供促進を行うとともに、引き続き京都市の改良住宅の留学生への提供や英語等での住宅情報の発信等を推進します。

◆相談窓口の充実等、海外からの留学生等とその家族への支援

◆インターンシップへの参加や就職機会の拡充等、留学生に対する就職支援

ちょっと注目

京都市国際交流会館

日本人も外国人も共に生きるパートナーとして互いに支え合う関係が作れる拠点施設です。

事業紹介

○留学生就職支援事業（ジョブフェア等）
○国民健康保険料補助事業 ○留学生ホストファミリー制度 ○在住外国人のための生活相談 ○メッセージコーナーの運営（web版含む）○住宅フェアの開催やHOUSE naviの運営） など

3 京都における生活を豊かにする取組

留学生がその能力を活かして京都で活躍し、帰国後には母国と京都との架け橋となるよう、京都における留学生生活の充実と、京都を好きになってもらうきっかけづくりを推進します。

重点

◆世界の学生が交流する機会の提供

留学生等の生活を豊かにし、京都のまちの国際化につなげていくため、「京都国際学生祭典（仮称）」や「京都国際音楽祭（仮称）」、国際映画祭等、世界の学生が交流する機会を提供します。

◆京都が好きになるきっかけづくり

留学生が、気軽に京都の様々な施設を見学・体験することにより、京都の文化芸術に親しみ、京都を好きになるきっかけとなるよう、京都市の元離宮二条城、京都国際マンガミュージアムをはじめとする文化施設の一定期間無料入場や、コンサート等イベントへの招待等「留学生優待プログラム（仮称）」を創設します。

◆留学生と日本人学生との協働・連携・交流の促進

留学生のパワーと日本人学生とのパワーの結集によって活動が活発化し、国際的な発信の媒体になるよう、世界遺産元離宮二条城において、学生運営によるお茶会をはじめとする留学生との交流会開催等、学生の主体的な活動における留学生との交流を支援します。

◆留学生との交流を促進するため、京都の伝統的な文化芸術等の体験活動への支援

ちょっと注目

留学生優待プログラムとは？

- 京都国際マンガミュージアムや京都市所有の元離宮二条城、京都市美術館等の文化施設に無料入場できる「留学生パスポート（仮称）」発行（無料入場期間 8月及び2月）
- 元離宮二条城における留学生交流会の開催
- 京都市交響楽団定期演奏会等への無料招待
〈いずれも実施時期 平成21年度（予定）〉

4 国際社会に対応した人材の育成

グローバルな視点を持ち、国際社会で活躍できる人材育成に向け、教育の質の向上に取り組むとともに、海外に留学した日本人学生が母国の魅力を伝えられるよう、京都の歴史や文化に関する教養を習得できるプログラムを開発します。

重点

◆日本人学生の海外への留学増加に向けた取組

大学の枠を超え、コンソーシアム間（大学コンソーシアム京都と海外のコンソーシアム）での留学プログラムを開発し、日本人学生が安心して留学できる仕組みづくりを検討します。

◆日本人学生の、海外の大学に対応できる学習能力構築に向けた講座の充実

◆伝統的な文化芸術等京都ならではのプログラムの開発・提供〈再掲〉



パワーあふれる「学生のまち京都」の実現

戦略ポイント

学生が持つエネルギーによる「京都力」の強化

1 学生の主体的活動への支援

「輝く学生応援プロジェクト（仮称）」や、日本人学生と留学生との交流促進等により、学生のパワーを高め、活動を活発にするための取組を推進します。

また、活動に役立つ知識習得や能力向上につながるプログラムを開発・推進します。

重点

◆学生の活動を応援するプロジェクトの展開

京都のまちの活性化に学生のエネルギーを活かすため、京都学生祭典への支援、キャンパスプラザ京都等も活用した、学生の活動の拠点づくりや、「学生の日」の創設、キラリと光る学生、地道に社会貢献する学生等を応援するための表彰・支援等の「輝く学生応援プロジェクト（仮称）」を学生の参画のもと展開します。

◆世界の学生が交流する機会の提供〈再掲〉

留学生等の生活を豊かにし、京都のまちの国際化につなげていくため、「京都国際学生祭典（仮称）」や「京都国際音楽祭（仮称）」、国際映画祭等、世界の学生が交流する機会を提供します。

◆京都の魅力に触れる学生生活への支援

京都で学生生活をおくるうえでの魅力を高めるため、三大祭や京都・花灯路への参画等、学生が、京都の伝統的な文化に触れる機会を広げるとともに、各種施設が利用しやすくなるよう、京都市施設の学生割引推進と各種施設への働きかけを行います。

◆活動能力向上に向けたリーダーシップ研修等と学生同士の大学間交流の促進

◆駐輪場整備をはじめとする、学生の活動範囲を広げる仕組みづくり

◆自主的な活動の場やサービスの提供等、多様な学生をサポートする体制整備



青少年ボランティア活動の様子
～サンタクロースプロジェクト～

ちょっと
注目

青少年活動センター

青少年の健全な育成と自主的な活動の促進の拠点として、市内7箇所に設置しています。

音楽スタジオやレッスンスタジオ等、青少年の創造的な活動を支援する施設の提供のほか、若者の意見を市政やまちづくりに生かす場づくりや青少年の社会参加を促進する事業を実施するなど、様々な取組を進めています。

2 学生のエネルギーを「京都力」向上へつなげる取組

学生の主体的な活動を推進するとともに、学生が持つエネルギーと自治会組織や商店街等の地域との協働を促進し、「京都力」の向上につなげます。

重点

◆学生と地域やNPO等との交流・連携の推進

学生と地域との交流促進に向け、地域の祭りや行事への学生の参画を促進するコーディネート機能を構築します。また、市民活動総合センターでは、学生がNPOや他の学生と交流できる場を提供します。

◆学生主体の環境に関する取組と京都市「DO YOU KYOTO?」プロジェクトとの協働

◆京都学生消防サポーター制度活用による、学生の力を地域の自主防災につなげる仕組みづくり

◆市政運営の企画・実施・評価等の各過程における学生の参画促進



ちょっと注目

京都市市民活動総合センター

市民活動総合センターは、NPOやボランティア団体等による公益的な市民活動を、特定の分野や領域を超えて、総合的に支援するとともに、市民の交流及び連携の促進を図るための拠点施設です。

市民活動総合センターの活用で、学生の活動のパワーアップが図れます！

3 学生の未来に向けた取組

学生にとって大学生生活は、今後の社会における活動のための、能力向上と社会経験の蓄積のための重要な期間であり、その学生の将来が輝かしいものとなるよう、職業教育の推進や京都の学生が京都のまちで活躍できる仕組みづくりを行います。

重点

◆卒業後の未来設計図を描くきっかけづくり

大学卒業後の将来設計が描けるよう、産業界との連携により、インターンシップ・プログラム、アントレプレナーシップ（起業家精神）教育等の更なる推進と、新たな職業教育プログラムの研究・開発を行います。

◆卒業後に、能力を京都で活かせる雇用促進に向けた施策の検討



ちょっと注目

大学コンソーシアム京都のインターンシップ事業

大学コンソーシアム京都においては、「インターンシップ・プログラム」を、平成18（1998）年度より全国に先駆けて展開し、これまでに50の大学・短期大学から5,000名を超える学生が、就業体験を行い、また、延べ2,000を超える企業や行政機関、非営利組織（NPO等）にご協力いただいています。

産学公地域連携の推進による京都地域の活性化

戦略ポイント

産業・地域の活性化,研究成果の活用に向けた連携強化

1 産学公の連携により,京都の経済を活性化し,雇用を創出する仕組みづくり

京都経済の活性化と雇用の創出に向けて,伝統産業をはじめとする,京都特有の産業の振興や技術の継承,先端産業の振興,新産業・知恵産業等の「ものづくり産業」を産学公連携のもと推進します。

重点

◆京都ならではのものづくり産業の推進

ベンチャー企業の育成や知恵産業の創出を図るため,「未来創造型企業支援プロジェクト」(*1)や「知的クラスター創成事業」(*2)の推進,「知恵産業融合センター」(*3)の創設など,産学公連携により京都ならではのものづくり産業を振興します。

◆産学公連携の推進に向け,「京都産学公連携機構」(*4)を活用した,コーディネート機能の向上

◆産学公連携による地場産業・伝統産業等の技術の継承

◆インターンシップへの参加や就職機会の拡充等,留学生に対する就業支援〈再掲〉

◆卒業後の未来設計図を描くきっかけづくり〈再掲〉

◆卒業後に,能力を京都で活かせる雇用促進に向けた施策の検討〈再掲〉

2 大学・学生と地域との連携の促進

大学が,地域を教育研究の実践・体験の場とすることで,京都のまち全体で学生を育てる仕組みをつくり,教育内容の充実と学生の人間としての成長につなげます。

また,地域にとっても大学と学生の力を課題解決につなげる機会として期待されることから,地域と大学の双方にとって有意義な連携を推進します。

重点

◆大学と地域との連携促進に向けた取組

「大学地域連携モデル創造支援事業」を充実するとともに,地域連携に関する取組の進め方に関するガイドブックや成功事例の発信,ポータルサイト(*5)の設置等への支援等,大学と地域の連携を支援する取組を展開します。

◆地域の課題解決につながる体験型学習等の地域型教育の研究

◆大学の図書館等の施設の開放,公開講座の開催等,地域や幅広い市民に身近な大学づくりへの支援

◆学生と地域やNPO等との交流・連携の推進〈再掲〉

◆京都学生消防サポーター制度活用による,学生の力を地域の自主防災につなげる仕組みづくり〈再掲〉



ちょっと注目

大学地域連携モデル創造支援事業

京都のまちの活性化に向けて,大学・学生と地域住民との連携・協働を,更に広げるため,先進的な取組を「モデル事業」として認定し,助成金を交付するなど活動を支援します。

3 小中高大(院)連携の推進

京都市内には、特色ある取組を行い、全国から注目を浴びる公立学校に加え、数多くの私立学校が集積しています。大学(大学院)が、これら地域の小学校、中学校、高等学校、更には、保育所、幼稚園、総合支援学校等と連携することにより、保幼小中高大へとつながる教育についての研究やネットワークを構築します。



ちょっと
注目

「学生ボランティア」による学校サポート

現在、66の大学等と協定を締結し、1年間に約2,000名の学生がボランティアなどで、学校の教育活動支援に参画していただいています。担任の補助、学校行事、部活動等の補助をしていただいています。

また、教職を目指す多くの学生をインターンシップとして受け入れています。

◆京都高大連携研究協議会を中心とした、高大連携の強化

◆「大学発教育支援コンソーシアム」構想の推進や市立学校等と大学の連携推進

◆産学公連携による「京都教育会議」の創設

4 大学との連携による研究の推進と活用

京都のまち全体がかかえる課題や京都の発展につながる研究を推進するとともに、研究成果を行政施策に反映するためのシステムを構築します。

重点

◆大学・研究者等の研究成果を京都の未来のまちづくりへ反映

各大学・研究者等の研究ストックも含め、京都がかかえる課題や、京都の未来に役立つテーマ等についての調査・研究を推進し、その成果を市政や未来のまちづくりに反映させるため、「最先端研究知シンクタンク(仮称)」(*6)の制度設計を行います。

(*1) 未来創造型企業支援プロジェクト

専任コーディネーターの配置や研究開発補助金制度の創設により、ベンチャー企業の発掘・育成から認定・発展に至るまで、きめ細やかで一貫した支援を行う事業。

(*2) 知的クラスター創成事業

「知的クラスター」とは、大学等の研究機関を核に、地域内外の企業等も参画して技術革新を創出するためのシステム。現在、文部科学省では世界レベルのクラスターとして発展可能な地域として、「京都・けいはんな学研地域」を含め全国で9地域を指定し、重点的に支援している。

(*3) 知産業融合センター

京都地域の中小・ベンチャー企業等を対象に、様々な伝統産業と先端産業の技術を結集し、技法・技能の共有と融合を図り、新たな「京都ブランド」の創出と技術者の養成を行う組織。

(*4) 京都産学公連携機構

京都における産・学・公のあらゆる機関が相互に情報を共有しながら、連携と協働を進めるための基盤として、平成15年2月19日に設置された組織。

(*5) ポータルサイト

インターネットの入り口に相当する商用のサイトのこと。検索システムやリンク集、ニュース配信などのサービスを提供する。

(*6) 最先端研究知シンクタンク(仮称)

京都市の政策を対象に、大学や産業界等で活躍する新進気鋭の研究者からなるシンクタンクを設置し、政策課題について調査研究を行うことで、研究者が持つ最先端の研究知を市政各分野の今後の政策立案に活かし、実践する。

計画推進組織

実施主体である、京都市、大学コンソーシアム京都、大学、学生、企業、地域、NPO等からなる「大学のまち京都推進会議」の機能を継承し、京都市と大学コンソーシアム京都とが協働で、計画の進行管理を行います。

事業の推進に当たっては、計画の推進状況の評価に、外部の視点や学生の意見を取り入れ、PDCA(Plan Do Check Action)のサイクルを構築し、十分成果が上がらない事業の見直し、新規事業の検討を行います。

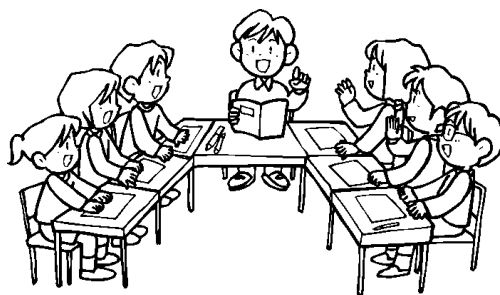
キャンパスプラザ京都の広報・PR

大学相互の間及び大学と産業界、地域社会等との連携及び交流を促進する活動のために、京都市が設置した、「大学のまち京都」のシンボルである、キャンパスプラザ京都(京都市大学のまち交流センター)が、学生のみならず生涯学習の拠点ともなるよう、更に幅広い層に向け、広報・PRを強化します。

※財団法人大学コンソーシアム京都は、大学連携の力を活かし、キャンパスプラザ京都の管理及び事業の指定管理者として、平成18年度から5箇年、委託事務を行っています。

計画推進期間

この計画は、近年の大学を取り巻く状況の変化のスピードを勘案し、平成21年度から5年間とします。



大学のまち京都・学生のまち京都推進計画 概要版

平成21(2009)年2月

京都市 総合企画局 政策推進室 大学政策担当

TEL 075-222-3103

FAX 075-213-0443

URL http://www.city.kyoto.lg.jp/sogo/soshiki/2-9-7-0-0_1.html

*この計画の本冊は、京都市総合企画局政策推進室(大学政策担当)のホームページに掲載するとともに、同室にて閲覧できます。

*表紙のイラストは、京都精華大学卒業生によるものです。